みなと物語

10か所あった港区の渡船

大阪市では、古くから市営の渡船が数多く運航され、現在も8か所の渡船が市民の足として利用されており、港区では甚兵衛(じんべえ)渡・天保山渡の2か所が運航されています。

昭和30年代の甚兵衛渡船

甚兵衛渡船は川幅94メートル、市営渡船で2番目に短い距離（最短は船町渡船（大正区）の75メートル）ながら、1日の平均利用者数が約1,570人（平成20年度）と、利用者が最も多い渡船です。天保山渡船は、市営渡船では最長の川幅400メートル、1日の平均利用者数は約900人（同）で、甚兵衛渡船、千本松渡船（大正・西成区）に次いで3番目に利用者が多い渡船となっています。

戦前の港区には、このほかに8か所、あわせて10か所もの渡船がありました。尻無川には、鶴浜渡・福崎渡・甚兵衛渡・中の渡・櫨(はぜ)の渡、また安治川には、天保山渡・築地(つきじ)渡・松の鼻渡・開昇(かいしょう)渡・三丁目渡があり、河川舟運が盛んで橋が架けられない当時の港区において、重要な交通手段として活躍しました。

港区波除と此花区を渡していた
三丁目渡（昭和36年）郷土出版社刊
「目で見る大阪市の100年」より

これらの渡船は、戦災で大きな被害を受けて休止を余儀なくされ、鶴浜渡・櫨の渡・築地渡は復活することなく廃止されましたが、他の渡船は戦後、運航が再開されました。しかし、松の鼻渡・開昇渡は昭和33（1958）年に廃止。この2渡船場があった場所は、安治川の内港化工事で河岸が削られ、川の中に没する形になっています。その後、福崎渡は昭和49（1974）年に、中の渡・三丁目渡も平成元（1989）年に廃止され、現存する2か所のみになりました。